

工藤委員からのご意見

議題 1. 事業の進捗状況について

議題 2. 持続的養蚕業の確立について

- (1) 課題の整理
- (2) 国産繭の試験的入札の結果について
- (3) 「蚕糸の日」の制定について

その他

消費者が市場で絹製品・絹関連製品を購入し、関心を持ち、使い続けることが大切だと思います。

他業種とのコラボ、できるだけ若い世代（中学、高校生）の感性、高い芸術性や技術を持つ方々の発想や連携などによる新しい「絹・絹製品」などへの期待もあります。

またオーナー制度や、1口株主など、支援制度の活用ももっと広げられたらと思います。

佐藤委員からのご意見

議題 1. 事業の進捗状況について

生産現場に係る結果は早急に普及願う。

消毒剤など「農薬」として適用拡大等の手続きが必要な場合は早急な手続きを願う。

議題 2. 持続的養蚕業の確立について

(1) 課題の整理

出された課題の解決方法はいつ議論し始めるのでしょうか。そしていつまでに実行し解決するスケジュールなののでしょうか。

案では生産工程で課題を分類していますが、個々の解決方法を検討する際には、(各委員の意見に従って課題を分類してみると、幅が広いので)「産業としての課題」「国民への理解浸透」「技術の継承」など少し違う視点で分けるのはどうか。そのうえで1~2年で解決できる目標を設定してはどうか。

(2) 国産繭の試験的入札の結果について

新しい試みなので土屋委員の意見にあるような様々な用途、新素材の試験入札も進めていただきたい。

併せて、このような取り組み(繭であれば産地、蚕期、品種が明らかであり、一定品質以上のものであることなど)を関係者にとどまらず広く広報してほしい。工芸家、事象工芸作家(趣味の人)も含め自然素材、繭、絹というキーワード(あるいはハッシュタグ#)に敏感な人は一定数以上いると推測するので、目に留まる工夫が必要。

また、ジャパンシルクセンター意外にも、各養蚕県の首都圏アンテナショップで”繭買いませんか”という広報チラシを置くことは安価で容易な方法ではないだろうか。

(3) 「蚕糸の日」の制定について

誰に何を周知したいのか? その手法は?

蚕糸功労賞表彰式の日と合わせるのは優れたアイデアであるがその目的は何か。式典に日に名称を付けて関係者にお知らせして終わるものなのか。

記念日を記念日協会に登録することで協会は何をしてくれるのか。例に挙げられている記念日(例えば豊の日、いぐさの日)に何かをPRになっているという実感はない。

国民行事としてのムーブメントにしたいのだろうか。それであれば表彰式と

合わせて大々的にPRをするのか。例えばユニクロとかしまむらとか多店舗展開している小売店と提携して「シルク月間」などと称して女性用品、子供用品の絹製品（例えば国産絹で作ったチーフとか）を原価程度の大安値で販売してもらい、女性・子供に身近に感じてもらうとか、何か販路や新たな需要が見通せるきっかけにしていきたい。

その他

今日まで養蚕を経営としてやってきました。

でも思います。それは桑苗作り、桑栽培、蚕の飼育、壮蚕飼育の機械化を自分なりに取り入れて、より良い経営を目指して来ました。

全て養蚕を経営（の柱）としてやって行くことが出来ました。でも、何か足りないものが（あるから）今、（ここまで頑張ってきたのに）止めていく生産者が多いと思う。

○農家の高齢化が進んでいる！

○後継者確保が難しい（養蚕農家に限らず農家そのものの後継者不足から、今や中山間地域に居住する人口そのものの減少）

養蚕をやっていてやりがいがなくなってきた。

養蚕業をめぐる課題が多すぎる。（検討会で話されている内容が、生産現場から非常に遠いところの話に聞こえて）生産者が考える課題なのか（と疑問を抱いてしまう）

（僅か百数十戸にまで”減った”のではなく”まだ百数十戸残っている”）生産者が激減しない様に（80歳代になれば”ある日突然”止めることがある）今（議論で出された課題と解決方法に）取り組まなくては数年で無くなる。

そうしないために何ができるか、安心を養蚕農家に感じさせて欲しい。（モチベーションの維持向上）

生産意欲を減退させない支援策について、これまで思いつかなかったアイデアを出し合い、実行（実験）していったらどうか。

例えば、繭代補填や生糸生産費補助などの「補助金」は直接的に経営を支えることになり、これまでも急激な減少を食い止め、緩やかな減少に抑えることはできたが、どうしても増産までには至らなかった反省はある。逆に、これらの「補助金」漬けは他産業と異なり農政分野ではあらゆる分野で長年続けてきた得意技でもある。

しかし、生産意欲の喚起に役立ったかといわれると疑問が残る。

それどころか、これらの「補助制度」が縮小・廃止された時に、自ら経営

を見直して自立できるようになるのではなく、「ここらが潮時か」とのがっかりした気持ちが真っ先に沸き起こり、“いつか止める日が来る”と漠然と考えてきたXデーが来たと感じ、一気に減少・ゼロを迎える危険もはらんでいる。

この感情を抑えるために、例えば増産を推奨する制度を構築できないだろうか。

前回述べたように、桑畑も高齢化している。改植して樹齢更新をしたくても桑苗が人手困難である。そのため収量が明らかに劣っている桑を育てなければいけない。しかも繭代が安すぎて“肥料代にもならない”ましてや肥料価格が前年の1.5倍近く値上がれば「今年は肥料無し」となっても仕方がない。

樹齢が高齢化していても規定量通りに肥料を人ればそれなりに収量もあがり、桑取り作業も効率的になり、よく食べた蚕は繭がしっかりして繭代も期待できる。と好転する。

そこで、“前年より収繭量が2割以上上げた養蚕農家”には「生産奨励金」として「補助金」ではなく、桑専用肥料の現物で渡すというのはいかがでしょうか。肥料会社の協力を得て、「桑専用費用用の商品券」を作り、養蚕農家に届ける。農家は栽培管理記録を記帳しておき、間違いなくその肥料を10aあたり〇kgという各県の管理基準通りに施肥したことを証明する。

要は、全国で数えられる戸数にまで減ってはしまったが、全戸を対象とするのではなく、「意欲を持って取り組む養蚕農家」には手厚い支援をするという発想である。

肥料と合わせて桑苗でも良い。今年から準備して、来年度は桑苗を〇千本用意する。(異常気象や気象災害の影響を受けた方もいるので) 過去3か年の平均より今年度は1割以上増産に成功した養蚕農家には無料で桑苗を配布するので樹齢更新を奨励する。桑苗に合わせて一律10aあたり〇万円、30aまでを上限とした抜根・整地費用を(これは交付金になるが)支給すると決めれば、必ず一定面積を改植し、さらに増産できるのではないか。

回転族も同様の理屈で“増産の意欲を生産量2割アップで証明した”養蚕農家に対して現物で数十組を支給するという制度は作れないか。

本検討会のような今後の蚕糸業のあり方を議論する検討会には、新商品開発やPRをコーディネートするプランナーのような人物を使って奇抜な視点で検討会そのものを運営させてはどうか。国内各地で地域づくりや地域産業の6次化や直売所開設を試行錯誤するためのワーキンググループを作るという流れの中で、プランナーに仕切らせる仕組みを見かけるが真似できないか。

日本の蚕糸業がこのような姿になっているものの、高水準の技術を維持しており、時代のキーワードとなる「天然素材」「高品質」「環境に負荷をかけない」(←たぶん・・・)を多く含んでいる産業であり製品であることを再度国民の理

解を深め、われわれの活動に共感し支援する機運を高める(= PR を行う)ために、何らかの集団にPRしていけないか。

蚕糸業が創業である大企業に協力を求め、その企業の新人社員研修のコースに「養蚕農家」「製糸工場」「織物工場」「工芸作家」などを訪問するモデルコースを作って提案できないか。

対象企業としてはトヨタ、日産など織機から始まった大企業はどうか。

また、大、本蚕糸会の立地である有楽町近くの手町、丸の内、有楽町は「大丸有」と称して三菱地所がいわゆる町内会のようなものを組織して循環型社会の形成や地方貢献などの活動を行っていた(いる?)、さらに丸ビル、新丸ビル等、地所に入居している社員に時差出勤を推進する流れで、早朝に開設するカルチャースクール「丸の内朝大学」を設け、「環境」「自然」「健康」「日本文化」などに目を向けた講座をすでに15年位前から展開している。

蚕糸業というキーワードはハマると思うがこういうところから新たな支持層を確保して、最初は趣味の範囲かもしれないが、消費者層の確保はあらゆる産業界で意識されていることだから検討されては いかがか。

須藤委員からのご意見

議題 1. 事業の進捗状況について

全体的に順調進行している。

★バイオ炭は、規模が小さいことから、中止しては、如何でしょうか？

議題 2. 持続的養蚕業の確立について

(1) 課題の整理

- ① 消毒剤は、順調です。生産基盤の確保と高品質繭生産体制の確立に向けての活気的役割です。→ 全国の生産農家への周知。
- ② 提携グループ化（平成 19～23 年）して、16・17 年目となる。当時、60G 以上あったのが、10G を下回る状況にあるため、良く調査、分析し、改めるべきである。
- ③ 繭生産団体としては、まず、第一に、繭価格を上げるべきです。
 - * 養蚕農家生産意欲の向上のため。笑顔で繭生産を！
 - * 団体・製糸を始め、大日本蚕糸会が仲裁となり、繭価額の最低保証価額から、繭再生産可能な価額をきめる（蚕品種別繭格差掛目等の見直し）。
 （関係者の分科会の開催）
- ④ 蚕品種の安定化：膿蚕の発生に伴い、上記の①の他に、11/27 暑さ・蚕病対策勉強会を年 2 回（春・晩秋の掃立前）・膿蚕・暑さに強い新蚕品種育成。

(2) 国産繭の試験的入札の結果について

入札は、大変良い。国産繭を周知させる絶好の場となります。（年に 3～4 回開催）生繭換算で 75～80 kg になり、生繭 5,000 円/kg を生産者への精算ならば笑み！

(3) 「蚕糸の日」の制定について

3 月 14 日の決定により、1 日だけでなく、2 日間くらい開催するべき。特に、川上の生産者、製糸、川中の機屋、染色等、川下の小売業者等の交流体制を整えること。 ★仮称：「蚕糸関係者の集い」

※マスコミの利活用。「国内産マユ消える!」「養蚕農家激減!」

その他

日本絹文化の原点は、持続可能な繭生産基盤の確立強化を図ることです。提携グループ化以来、繭価額は、アップしていません。直接生産費等の高騰により、農家所得は、減少し、高齢化とともに、養蚕農家、繭生産量など激減下ありま

す。また、後継者の育成にも繋がりはありません。これから脱皮するには、繭価額のアップが必要です。そして、生産者が安全、安心して、飼育出来る環境を即立て直すよう、貴会のご尽力が重要ですので、よろしくお願い致します。

土屋委員からのご意見

議題 1. 事業の進捗状況について

- ・新たな混合薬剤による蚕室消毒については、近年の蚕病発生拡大への対策として期待されます。弊社としても群馬県とも連携しながら技術の普及に努めるため研修会等を実施する予定です。
- ・国産繭の付加価値向上については、EU で進行しているシルク産業イノベーションエコシステムの日本版を早急に展開されることを期待します。我が国は生きたシルク産業が残る世界で唯一の先進国です。その技術を世界のシルク産業に活かしながら未来につなげるエコシステムの展開を期待します。日本 ICOMOS が考えているヘリテージ・エコシステムとコラボして、日本の絹の歴史、文化、産業を未来に結んで行くことを期待します。
- ・国産生糸展示会・商談会については農研機構、経済産業省等を通じて新たな素材等としてシルクに関心のある企業等への周知をお願いします。

議題 2. 持続的養蚕業の確立について

(1) 課題の整理

- ・再生産が可能な繭価格をどのように確保していくかの方向性を明確にする必要があります。養蚕産地では令和 7 年度で大日本蚕糸会からの繭代支援がなくなるなら養蚕をやめるといふ風潮があるので、国内の蚕糸業を堅持するためには養蚕農家の不安の払拭が不可欠と考えます。
- ・日本の蚕糸業を残してゆくため、蚕種、人工飼料、稚蚕飼育所、養蚕農家、製糸を一連のシステムをどのような形で残していくのか。国、群馬県も含めたビジョンの作成が急務と思います。

(2) 国産繭の試験的入札の結果について

- ・国産繭に加えて、国産生糸や遺伝子組み換え生糸の試験的入札の検討をお願いします。

(3) 「蚕糸の日」の制定について

- ・大変良い結論に着地したと思います。全国の蚕糸絹業関係者や世界遺産富岡製糸場と絹産業遺産群、絹関連の日本遺産などと連携しながら、「ホワイトデーには純白のシルク！」のようなイベントが展開できたらと思います。